

はないだろうか。

(注3) 「わるくなる」と言い換えができるのは主語が勢い・記憶力・容姿・色つやなどの場合、「おちぶれる」「没落する」と言い換えができるのは主語が家・国などの場合である。

なお、従来の記述で「おとろえる」と「おちぶれる」「没落する」を比較したものとしては国立国語研究所1972がある。

(注4) 「おとろえる」が「おちる」と類似した意味をあらわすのは、主語が体力・思考力・食欲・人気などの場合。だが、価値的な低下をあらわす「おちる」でも、主語が品質・鮮度・成績などの場合は「おとろえる」と置き換えることはできない。

また、「おとろえる」が「おちる」と置き換えられる場合も、一般的にいて「おちる」の方が「おとろえる」より急激な大きい変化という感じを与えるようである。

「おちる」については、徳川宗賢・宮島達夫1972、森田良行1977、柴田武1976、国立国語研究所1972などに記述がある。しかし、「おとろえる」との比較の方面からの分析などまだ残された問題もあるように思われる。

言語経歴：1958年10月、東京都世田谷区に生まれ、現在に至る。

みつめる・ながめる

迫田幸子

1. はじめに

「みつめる」「ながめる」は、視覚に関して用いられる感覚動詞である。この二語は、多くの場合言い換えができるが、そこには、ニュアンスの差が生じる。たとえば、

- (1) みんなは Aさんのすることを みつめている。
 - (2) みんなは Aさんのことを ながめている。
- (1)と(2)の文は、〈Aさんのすることを見る〉という意味では同じである。しかし、見る態度に微妙なちがいのあることを感じさせる。そして、
- (3) 富士山は ここからながめるのが、一番きれいだ。

という時には、「ながめる」を「みつめる」で言い換えることはできない。

このような差は、二語のどのような特徴によるものであろうか。ここでは、「対象を見るやり方」を分析することによって、二語の差について考えたい。分析にあたっては、機能—視覚をどのように働かせるか、心理—対象に対してどのような心的態度をとるか、の二つの観点から見てゆく。

辞書によるこの二語の語義をあげておく。

「みつめる」

- イ) じっとそのものだけを見る。
- ロ) 長く目をとめて見る。

「ながめる」

- ハ) もの思いなどして、つくづくと見る。

うっとりとみつめる。

ニ) はるかに遠く望む。見渡す。

——「新版・広辞林」

2. 従来の分析

「みつめる」については、国立国語研究所1972の中に、「にらむ」との比較においてなされた分析がある。そこでは、「みつめる」の意味を次のようにまとめている。(p. 479~481)

- ① “一定の感情”をこめてじっと見る。
- ② ある目的をもって(ある情報をえたいために)対象を注視。
- ③ 結果として対象を注視。

また、柴田編1979では、「みる」「みつめる」「ながめる」の三語の比較の中で、以下のような分析を行っている。(p. 70~77)

- ⑦ 「ながめる」「みつめる」のどちらも、見る動作を行なう時間が短い場合には使わない。
- ⑧ 知覚される視野が「みつめる」では狭く、「ながめる」では広い。
- ⑨ 「みつめる」では視線が固定されているが、「ながめる」では視線を大きく移動させることが可能。
- ⑩ 「ながめる」では「みつめる」に比べ、心に余裕がある。そのため、「ながめる」は、鑑賞の態度や傍観的態度を含む。
- ⑪ 「ながめる」はく対象物が何であるかすでに認識

されている)ことを、前提とする。

これらの分析のうち、特にとりあげるものは、柴田編1979の④・⑦・⑨である。他の点での分析は妥当であると思うので随時参考にしてゆく。

3. 分析

3. 1. 分析の方法

この二語は、主に、次の文型において使われる。

Aガ Bヲ みつめる/ながめる。

A: 動作の主体

B: 動作の対象

以後、この文型を中心に分析してゆきたい。ただし、分析のポイントを“対象を見るやり方”におくので、随時、副詞または副詞相当語句を使ってみる。

3. 2. 対象

3. 2. 1. 視野の広さ

ここで問題とすべき視野とは、上下左右にどこまで見えるかという本来の意味での〈可能性としての視野〉ではなく、どのくらい見ているかという〈意識としての視野〉である。意識にとらえるとは知覚することだから、〈知覚される視野〉とも言えよう。

この〈知覚される視野〉について、柴田編1979は、「みつめる」では狭く、「ながめる」では広いとしている。この分析は妥当であると思われる。

(4) 海岸に出て、海を ながめた。

(5) 海岸に出て、海を みつめた。

(4)が、空やその他のまわりのけしきをも含めた海全体を見ているのに対し、(5)は、海のごく限られた一部、たとえば、水平線とか岬のあたりなどを見ていることを感じさせる。

それでは、知覚される視野は「みつめる」ではどのように狭く、「ながめる」ではどのように広いのだろうか、対象との関係で、具体的に考えてゆこう。

(6) 壁のポスターを みつめる。

(7) 壁のポスターを ながめる。

(8) *部屋じゅうにはられたポスターを みつめる。

(9) 部屋じゅうにはられたポスターを ながめる。

(8)で示されるように、「みつめる」は“壁じゅうにはられた、いく枚ものポスター”というような複数の対象をとることはできない。

しかし、次のような場合には、複数の対象をとる。

(10) 冬空に輝くオリオンを みつめる。

(11) 草を食べている馬の群を みつめる。

この二つの例文においては、いずれも、対象を複数

という意識でとらえてはいない。即ち、一つのかたまりとしてとらえている。オリオンを、いくつかの星として意識せず、星のかたまりである星座としてとらえ、馬も一頭一頭の独立した存在ではなく、集団としてとらえているのである。

「みつめる」では、対象が複数の場合には“まとまり”としてとらえるかどうか問題となる。ここで、“まとまり”としてとらえるための条件を考えておこう。
▷条件

i) 対象が相互に近接したものとして知覚されること。

——この対象間の距離は、物理的距離ではなく、相対的距離である。これは、主体と対象との距離と、対象間の距離との関係によって決まる。それぞれの対象が主体から遠くはなれているほど、対象は相互に近接したものとして、とらえられる。

「みつめる」においては、同時に一つの視野のうちにとらえることが可能である程度の近接が、要求される。しかし、これは、最低限の要求であり、実際には視野の中央部にとらえることが可能であるほど、対象が相互に近接していることが、要求されるように思われる。

ii) 対象が相互に類同性又は関連性を持つこと。

——同じものや心理的関連をもつものの方が、まとまって見えやすい。たとえば、馬や牛の混ざった群を見た場合、距離の条件が同じならば、馬は馬どうしのまとまりとして見えやすい。

「みつめる」では、以上のような制限があり、〈意識〉を重視すると、“心的に複数である対象”は、ヲ格にとれない。原則として、複数の対象はとらないと言える。

これに対して、「ながめる」にはそのような制限はない。(7)と(9)からわかるように、「ながめる」では、対象の単数・複数を問わない。ひいては、一度に視野の内におさめることができないような広範囲に分布する複数の対象をも、とることができる。

ここまでは、数えることができる対象について視野の考察をしてきたが、数えることができない対象はどうだろうか。後者の代表としては、〈風景・場面〉があげられる。

(12) *山にのぼって、下にひろがる町のけしきを みつめる。

(13) 山にのぼって、下にひろがる町のけしきを ながめる。

(14) *ここからは、富士の全容を みつめることができる。

(15) ここからは、富士の全容を ながめることができる。

(16) ?交通事故現場の惨状を みつめる。

(17) 交通事故現場の惨状を ながめる。

ここでも、「みつめる」は、一回でその視野におさめることのできないような広範囲のものは、対象とすることができない。

(18) 山にのぼって、ふもとにある集落を みつめる。

(19) ここからは、富士の頂を みつめることができる。

(20) 事故現場で、負傷者が 救急車に収容されていく様子を みつめる。

(21) 事故現場で、ペシャンコになった車とまわりにとびちったガラス片を みつめる。

(18)・(19)のように、「みつめる」では、風景の中の一部分をとり出す。また、場面の中でも、(16)より(20)・(21)のように、ある特定の部分を限定して、使われることの方が多い。

このような断片的なとらえ方をすると、風景や場面は、その本来の要素である「広がり」を失う。このことから、「みつめる」が風景や場面そのものを対象とすると、言いがたい。風景や場面を構成する要素の部分的まとまりを対象とするのである。

「ながめる」は、その点、風景や場面をそのまま対象とすることができる。一回で、視野におさまらぬほどの広範囲をも、対象とすることができるのである。

ここまでの結果から、視野と対象についてまとめてみたい。

「みつめる」では、知覚される視野は、本来の視野の中心部である。そして、その知覚された視野の中に、広がりをもたない一つにまとまった対象を把握する。この把握のしかたは、点的把握と言えよう。

「ながめる」では、本来の視野の周辺部を除いた部分であろう。ただし、視点の移動により、いくつかの視野が合成されるので、可能性としてはかなり広くなる。その視野の中に、広がりをもった対象をそのまま把握する。面的把握と言えよう。

3. 2. 2. 視点のおき方

柴田編1979では、「みつめる」「ながめる」の意味特徴を分析する際に、〈視線〉をとりあげた。「みつめる」では、視線が固定されており、「ながめる」では視線

を大きく移動させることが可能である、というのがその分析である。

しかし、〈視線〉を中心として考えた場合には、次のような「みつめる」の例が説明できない。

(22) Aが 歩いてゆくBの後姿を みつめる。

(23) スタンドのファンが P選手の動きを みつめる。

(24) 最終コーナーをまわり、一団となって走る馬を みつめる。

これらの例文では、ヲ格にきているのは、いずれも動いているものである。そして、カ格の動作主は静止しているのだから、当然、この場合には、視線の移動（「視線」とは、『広辞林』によると、「眼球の中心点と外界の対象とを結ぶ線」である。）があると考えられる。

ここでは、〈視点〉をとりあげた方が、説明しやすいように思う。（「視点」とは、「注視点」の意味である。「目から物体上へ視力の中心が到達する点」とされる。）

(25) *Aが Bを 上から下まで みつめた。

という文が言えないように、「みつめる」においては、視点の移動はない。(22)~(24)の文でも、視点は、それぞれ、「B」「P選手」「馬の群」に固定されたままである。

「ながめる」ではどうだろうか。

(26) Aが Bを 上から下まで ながめた。

(27) 議長が 会議の出席者の顔を ぐるりとながめた。

(28) Aが 歩いてゆくBの後姿を ながめる。

「ながめる」には、視点の移動のある場合——(26)・(27)と、視点の移動のない場合——(28)とがある。「ながめる」における視点の移動は、視野の拡大を助けている。視点の移動には、次の二通りが考えられる。

i) 一つの対象内における視点の移動——(26)の例

ii) 複数の対象に向かった場合の、対象間での視点の移動——(27)の例

この二通りの視点の移動が「ながめる」においては、その場に応じて使い分けられているようだ。i)の移動は、対象を〈つくづくと見る〉の意に、ii)は〈見渡す〉の意につながるものである。

3. 2. 3. 抽象的な対象について

これまで、目に見える具体的対象を中心として扱ってきた。ここでは、表面見えてはいないものを対象とするような、抽象的な対象を扱ってみたい。

抽象的な性質の代表は〈性質〉である。認識にあたって、視覚の働きが考えられるような性質については、国立国語研究所1972の中に、分類があるので、それを参考にしたい。「みる」動作の対象となる性質についての分類である。

▷性質の分類

i) 動的な性質

—そぶり・歩きっぷり・あわて方・苦しがり
よう等

ii) 静的な性質

—形・かっこう・輪郭・色・色合い・顔立ち・顔つき・指つき・眼色・身なり・表情・面影等

iii) 静的でも動的でもありうる性質

—ありさま・情景・光景・惨状等

(これらの性質は、文脈との関連からi)かii)のどちらかに区別できる)。

ここにあげられたもののうち、動的な性質については、3.2.1., 3.2.2.の例文の中にも見出せる。

(20) 事故現場で、負傷者が救急車に収容されていく様子を みつめる。

(23) スタンドのファンが P 選手の動きを みつめる。

これは、どちらも「みつめる」についての文だが、「ながめる」で言いかえることができる。

他にも、

(29) X氏の堂々たる歩きっぷりを みつめる。

(30) X氏の堂々たる歩きっぷりを ながめる。

(31) 子猫が毛糸玉にじゃれる様子を みつめる。

(32) 子猫が毛糸玉にじゃれる様子を ながめる。

のように、「みつめる」「ながめる」ともに動的な性質を、対象とすることができる。

静的な性質はどうだろうか。

(21) 事故現場で、ペシャンコになった車と まわりにとびちったガラス片を みつめる。

この文は「ながめる」で言いかえができる。

(33) *床の間に飾られた花びんの形を みつめる。

(34) 床の間に飾られた花びんの形を ながめる。

(35) *染め上がった着物の色合いを みつめる。

(36) 染め上がった着物の色合いを ながめる。

(37) *成長した子どもの横顔にある昔の面影を みつめる。

(38) *成長した子どもの横顔にある昔の面影を ながめる。

(39) 最期のときを前にして、老人の顔に浮かんだ安

らかな表情を みつめた。

(40) 最期のときを前にして、老人の顔に浮かんだ安らかな表情を ながめた。

(41) 通路をへだてた向こう側の席に坐った男のいかにもずるそうな顔立ちを みつめた。

(42) 通路をへだてた向こう側の席に坐った男のいかにもずるそうな顔立ちを ながめた。

静的な性質については、はっきり傾向はつかめない。ただ、これは仮説であるが、抽象度が問題になるように思われる。すなわち、「形」や「色合い」は、「表情」や「顔立ち」よりも抽象度の高い対象であり、「面影」はさらに抽象度が高い。このことから考えると、次のことが言えるのではないだろうか。「みつめる」は抽象度の低い時に使えるのみであるのに対し、「ながめる」はそれよりも抽象度の高い対象に対して使うことができる。しかし、「面影」のような目に見える具体的対象そのものとの結びつきが薄れ、ある特定のイメージの方にポイントがおかれてしまう抽象度の高いものになると、「ながめる」も使うことはできない。

この抽象度の仮説は、動的な性質にも適用できる。一般に、静的な性質に比べて、動的な性質は、抽象度が低い。だから、「みつめる」「ながめる」ともに、使えるのである。

「ながめる」が、抽象度の高い対象をとることができるということは、「ながめる」の意義特徴に関係あることだと思われる。が、その考察については、心的態度の分析の中で扱いたい。

3. 3. 心的態度

3. 3. 1. 語のもつ緊張感

(43) どうしても、この苦境を打開しなければ、とレイは歯を食いしばって、手にしている飲みかけのハイボールを じっと みつめた。

(「3. 1. 2とノックせよ」 創元推理文庫F. プラウン、森本清水訳 p.182)

「みつめた」を「ながめた」で言いかえても、文として言えないことはない。だが、そうすると、この文の持つ緊迫感がうすれる。

(44) 刺すような視線で みつめる。

(45) *刺すような視線で ながめる。

(46) 食い入るように みつめる。

(47) *食い入るように ながめる。

(48) 何事かを訴えるかのように 相手を みつめる。

(49) *何事かを訴えるかのように 相手を ながめる。

“刺すような視線で” “食い入るように” “何かを訴えるかのように” は、いずれも「みる」という行為の激しさ・強さを表わす語句である。これらの語句を伴った時には「ながめる」は使いにくい。

「ながめる」は「みつめる」よりも、緊張感が弱い。この点は、柴田編1979でも、

「ながめる」では、「みつめる」よりも、もっと心理的余裕がある。(p. 75)
という形で、指摘されている。

3. 3. 2. 鑑賞的な態度

(3) 富士山は ここからながめるのが 一番きれいだ。

(50) 展覧会で、絵を ながめて、半日を過ごした。

この二つの例文では、「ながめる」は「鑑賞する」の意で使われている。この意味のときには、「みつめる」との言い換えはできない。「みつめる」には、鑑賞のために必要な心理的余裕がない。

3. 3. 3. 人間が対象の場合に生ずるニュアンスの差

3. 3. 2. で述べたように、「ながめる」には「対象を鑑賞する」という意味あいがある。鑑賞するということは、〈対象と自分との間に距離をおいて、客観的に見、品定めをする〉ということにつながる。この“対象を客観的に見る”というやり方のため、「ながめる」と「みつめる」の間には、心理面での差が生じるのであるが、この差は人間を対象とした時に顕著なものとなる。

(51) 観客は 次々とステージに出てくるミス・ユニバースの候補者を ながめた。

ここでは、人間は、鑑賞・評価の対象であり、人間そのものとしては扱われていない。品定めをされる一種の“物体”である。それでも、(51)のような例では、状況がコンテストという人間評価を目的とする場であり、対象となる人間自身も、それを承知しているのだから、人間が客観視されても特別な感じは生じない。しかし、

(52) 母親が 病気の子どもを ながめる。

(53) 恋人の顔を ながめる。

のような、一応、愛情が予想されるような相手について「ながめる」を使った時には、必ずしも、相手を鑑賞、評価の対象にしているとは言えない時でも、いささか“冷たい”感じを与えることがある。

(54) 母親が 病気の子どもを みつめる。

(55) 恋人の顔を みつめる。

(52)(53)と(54)(55)を比べると、「みつめる」と「ながめる」の差ははっきりする。「ながめる」が、相手との心理的距離をおき、それを保とうとするのに対し、「みつめる」は、その距離をちぢめようとする。「みつめる」は積極的に相手にかかわろうとし、「ながめる」はそれをしない。だから、積極的なかわりあいが予想される場面で「ながめる」を使うと、冷ややかな感じを与えるのであろう。これは、程度の差はあるが、愛情が予想されるような関係以外にも、相手を人間として意識するような関係においては、言えることである。

また、人間を客観視するということは、積極的にかかわってこうとしないことの他に、人間を観察の対象とすることをも含む。この傾向が顕著に現われているのが(51)の例文である。このように、人間を「ながめる」場合には、人間を“物体”として扱うといったニュアンスが出てくる。「みつめる」の場合には、このニュアンスはない。

3. 3. 4. 「ながめる」行為における心理面の重要性

ここでは、3. 2. 3. で保留しておいた問題を、3. 3. 2. の内容とあわせて考えてみたい。

3. 2. 3., 3. 3. 2. の分析から、「ながめる」は抽象度の高い対象をとることができること、また、対象を鑑賞するという意味あいのあることがわかった。これは、何を意味しているのだろうか。

抽象と鑑賞には、ともに高度な心の働きが必要とされる。この二つの要素が「ながめる」の中に含まれているということは、「ながめる」においては、視覚による対象把握だけでなく、対象把握にあたっての心の働きも重要であることを示しているのではないだろうか。対象を見る時に、物思いや漠然とした感情などの形で、心が動く。この心の動きは、対象との因果関係だけで説明することはできず、多くは、主体の側のその状況における心理状態に起因すると思われるものであるが。

視覚による対象把握に、このような心の動きまでを含めたものが「ながめる」行為なのである。これに対し、「みつめる」では、視覚による対象把握だけが問題とされる。

3. 4. まとめ

▷ 両語に共通な意義的特徴

対象に対して、ある程度の時間、視覚を働かせる。

▷ 各語の特徴

「みつめる」

視覚による対象把握のみが問題となる。

動作の特徴

知覚される視野は、狭い。(本来の視野の中心部) その視野の中に、対象を点的に把握する。このため、複数として意識されるような物体や風景・場面そのものは、対象とすることができない。視点は固定されている。

心的態度

心的な緊張感がある。対象に注意を注ぎ、積極的にかかわっていこうとする姿勢がみられる。対象に関しての価値判断などの心の働きは、認められない。

「ながめる」

視覚による対象把握と共に、その際の心の動きが問題となる。

動作の特徴

知覚される視野は「みつめる」より広い。それだけでなく、視点の移動が可能のため、視野をかなり拡大することができる。このため、一度に視野の内におさめることができないような広がりをもつものをも対象とする。その把握のしかたは、面的把握で、広がりをもったものから特定の部分を取り出すことなく、そのまま把握

する。

心的態度

対象との間に心理的距離をおこうとする客観視の態度が、根本にある。このため、鑑賞その他の意味あいが出てくる。また、人間を対象とする時には、その客観性から、人間を物体として扱うニュアンスが生じ、冷やかな感じを与える場合がある。

4. おわりに

この分析では、終始「みつめる」と「ながめる」の二語だけを扱った。が、他の関連語との分析を試みることは、新しい観点からの分析を可能にするから、その意味で、必要であろう。あわせて分析しなければならない動詞は、「みつめる」と「にらむ」、「ながめる」と「みやる」である。

最後に、分析を進めて行くにあたって、的確なアドバイスをし、寛大な目で見守ってくださった、先生とゼミの方々にお礼を申し上げます。

言語経歴：1959年2月東京都豊島区生。0歳～3歳豊島区。3歳～4歳板橋区。4歳～ 埼玉県入間郡鶴ヶ島町。

さめる・ひえる

柴田 稔

1. はじめに

「さめる」「ひえる」は国立国語研究所1964の「2.517熱」に分類されているが「2.5161火」の項の動詞や「2.5160凍り・さびなど」の「こおる」などとも関連があると思われる。これらの動詞が意味するのは「熱(温度)変化とともに起こる、ものの変化」「熱(温度)変化そのもの」など、自然現象の中の変化であるが、日常生活の中で一般に広く「ものの温度変化」を表すのは「さめる(さます)」「ひえる(ひやす)」「あたたまる(あたためる)」であろう。ここでは、温度の下降を表す「さめる・ひえる(さます・ひやす)」を分析し、意味的に関連があると思われる語についても考えていきたい。

2. 分析

2. 1. さめる・ひえる

2. 1. 1. 主体

- (1) ご飯が さめる。
- (2) ご飯が ひえる。
- (3) 湯が さめる。
- (4) ビールが ひえる。
- (5) 熱せられたガスが さめる。
- (6) クーラーで 部屋の空気が ひえる。

「さめる」「ひえる」とも固体・液体・気体を問わず、主体とすることができる。「ひえる」にはさらに次のような用法もある。

- (7) 冬が近付くと 夜は ひえる。
- (8) 盆地は 夜になると ひえる。
- (9) 秋が ひえるにつれて……

〔「雪国」国研1972の用例より〕

「さめる」にはこのような用法はない。時間、季節などは、そのまま主体とは考えにくい、それぞれ夜